

Daichikyo News

大地協ニュース

大地協ニュース復刊 第16号

発行元：NPO 法人 大阪市地域福祉施設協議会

企画委員会《 広報宣伝部 》

発行日：2022 年 9 月 第 16 号

担当窓口：望之門保育園 佐伯 剛

Tel 6651-7741

Fax 6652-8841

大地協の最新☆情報は右記 →

QR コードをご覧ください。



大地協ニュースへのご感想・記事テーマリクエストなど

上記担当窓口まで皆様のお声を頂けましたら幸いです。

コロナ禍のバザー開催にあたって

皆さま初めまして、今年の4月より育徳園保育所の施設長を務めます早川友教です。前任者が倉光先生ということで、事の重大さをひしひし感じております。又大地協の皆さまとは、今年度より一緒にさせていただきます。慣れぬ事ばかりなので、何かとご迷惑をおかけしますが、やるからにはベストを尽くす覚悟です。どうぞよろしくお願いいたします。

さてここ 3 年は、日本中がコロナの猛威に振り回され、大地協においても様々な活動が、中止される事態となりました。特にバザーは大地協の大切なイベントです。この収益がセツルの家の維持管理にあてられ、子どもたちの夏の楽しい思い出につながります。ところが過去2年は、その開催が見送られてきました。しかし、今年度ぜひバザーを復活させたいという機運が高まり、開催の運びとなりました。そして今回、育徳園がその担当となりました。しかしながら第 7 波の現状を見れば、様々な年齢の人が一同に会するバザーは、困難と言わざるをえません。今後も、コロナと共存していかなければならないでしょう。そこで今までと全く違う形のバザーに、挑戦してみようと考えました。それは、ネットを利用したバザーです。突然ネットのバザーと言われても、よく分からんというのが正直なところでしょう。ただネットの活用により、コロナや天候にも左右されないバザーが、可能になるのではないかと考えました。しかしながら、具体的にどのようにやろうか暗中模索状態です。

そこで今回育徳園単独ではなく、広く大地協の皆さまのご協力を願い、パソコンやネットに詳しい方たちの力を、お借りしたいと考えました。すでに協力

のお願いは、お手元に届いているかと思います。ぜひネットによるバザーという、新たな試みにご理解をいただき、皆様のアイデアをどしどしお寄せいただきたいと思います。

今回のバザーの名称を「 **幸分 ～ 今わたしたちにできること ～** 」

としました。この幸分(こうぶん)とは、育徳園の創立者である早川徳次翁が大切にされた言葉です。己の幸を広く多くの人と分かち合おうという意味で、育徳園保育所のホールにも、その名が刻まれています。さらに副題として ～今私たちにできること～ を掲げました。一人一人のできることは、限られているかもしれませんが、その一つ一つが集まることにより、新しい事にチャレンジする大きな力になりたいという想いが込められています。

このコロナ禍だからこそ、オール大地協としての、新しいバザーを作ろうではありませんか。

どうぞ皆様のご理解ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。



社会福祉法人育徳園

育徳園保育所 園長 早川 友教

子どもたちが暮らす地域だからこそ



愛染園南港東保育園は 44 年前、南港地区の子ども増加に伴い、保育施設を求める地域のニーズに応じて開設された施設です。しかし、社会情勢と同様、近年の南港地区も少子高齢化に影響され、年々乳幼児の数は減っています。開園10年くらいは100%近隣団地の子どもたちでしたが、近年、他地域からの入所や外国籍の家庭が増加し、保護者の多様な考え方や家庭状況、地域のニーズの変化も見られます。しかし、そのような状況においても保育園に、ずっと変わらない地域とのつながりがあります。運動会は公園内の真ん中にあるグラウンドで現在も行い、町会長をはじめとし、民生委員や主任児童委員、小学校関係者、ボランティア、高齢者に見守られながら地域の児童や未就園児の子どもたちとも一緒に、地域の方と楽しい時間を共有しています。その他、秋になると園のグラウンドで行っている焼芋大会ではいつもお

世話になっている地域の方を招待しています。子どもたちが芋を洗い、アルミホイルを巻いて準備し、火の中に投入した後は、「おいしくなれ♪」の魔法をかけます。あま〜い焼芋の匂いに誘われながら地域の方が遊びに来て、熱々のお芋を食べながら子どもたちとの世代間交流がはじまります。

近年、子どもたちを取り巻く環境は大きく様変わりしています。少子化や核家族化、都市化によって人とかかわる機会が減りつつあります。かつての町の中でみられた人と人の交流はもはや「あたりまえ」のものではなくなってきています。これからも時代の流れや子ども・保護者・地域のニーズを感じる事ができるように自己のアンテナを磨き、小さな「声」にも耳を傾ける姿勢は忘れないでいたいです。制度や時代が変わっても「変わってはいけない守るべきもの」と課題に合わせて「創意工夫し変えていくもの」があります。私たちは、話し合い、実践し、また振り返る中で「子どもたちが暮らす地域にとって何が一番いいのか」をいつも問いながら、人とのつながりを大切に、職員全員で力を合わせて、これからも地域に愛される園でありたいと思います。

社会福祉法人 石井記念愛染園 幼保連携型認定こども園

愛染園南港東保育園 園長 森 典子

都島に咲くひまわりの花



ひまわりの郷は、都島区都島本通にあります特別養護老人ホームです。ホームの母体である都島友の会は、昭和6年に法人創立者の比嘉正子26歳の時、彼女の理想とする教育的要素と養護的要素を兼ね備えた子どもの館「都島幼稚園」を創立し、戦前戦後を経て現在に至る法人の礎を築き、都島の地で90年の歴史を重ねてまいりました。現在、認定こども園5か所、乳児保育センター3か所の他、児童・乳児等を対象にした施設を多数抱え、地域の子どもの健やかな成長に寄与する社会福祉法人として活動を続けてきました。また、高齢者施設としては「特別養護老人ホームひまわりの郷」「友洲地域在宅サービスステーションひまわり」「訪問介護ひーぐるま」の3か所があり、この3施設は相互に連携して、地域の高齢者の皆様が住み慣れた町で安心して暮らせるお手伝いをしており、90年昔、都

島幼稚園に通われたお子さんが、高齢になり「ひまわりの郷」の入居者になる例もあり、まさに地域に根差した法人としての道を歩んでいます。私が勤務する「ひまわりの郷」は平成14年に開設され、今年で20年を迎えます。写真のような外観で、居室部分は2~5階に、居室スペースを広く取り、入居者様にはゆったりとした空間を提供しております。特養定員数は81名と短期入所定員9名 合計90名で運営しております。平成3年度では延利用者は31873名 稼働率は97.03%、平均介護度は4.16となっています。現在もほぼ満室の状況です。

私は、病院での勤務が長く、大阪市の伝染病の歴史とともにあった桃山病院という感染症専門の病院から1000床を超す大阪市立総合医療センターの建設から開院、その後病院の管理部門を中心に仕事をしてまいりました。その中で、吹田にあります弘済院という福祉施設で勤務しておりました。約10数年のブランクがありますが、認知症専用施設での介護や高齢者専用病棟での見守りを中心とした看護などその時得た知識を思い出しながら仕事に取り組んでいきたいと考え、CWや介護福祉士の皆さんと再び仕事をする事を楽しみにしております。

社会福祉法人 都島友の会

特別養護老人ホーム ひまわりの郷 施設長 木幡 利至朗

地域生活で人と人をつなぐ居場所の力

地域の喫茶店や定食屋さんなど、生活の身近にある居場所には、世代や立場の垣根がない気軽な人と人のつながりがあり、そのつながりの中にあたたかな人情がみられます。そのような多様な人が集まる地域の居場所をつなぎながら、垣根のない新たな居場所づくりができるといいと思います。

理由として、高齢者世帯や単身世帯、同居世帯であっても、救急搬送や保護され初めて周囲に生活状況がわかることが少なくないからです。また、困窮や病気で倒れていても、誰も気づけないことや、老々介護で介護者が倒れ連絡ができない状況が多々あります。90代の親世帯に、引きこもっている子どもがいる、金銭的な困窮などで子どもが家事や介護を一人で担う（ヤングケアラー）など、介護保険サービスの相談を通じて知るだけでも、家庭内で様々な困難を抱えています。歯車が崩れると全てが崩れてしまう、本人や家族だけではどうしようもない連鎖に陥り「複合的な問題を、サービスだけでは、支えられない」「家族の問題や困窮で迷惑をかけられない、知られたくない、家族や親しい友人だからこそ話せない」など、様々な事情や当事者の複雑な心情が、相談のハードルを高くして孤立するのではないかと考えます。高齢者に限らず SNS などのデジタルツールで容易くつながれる世代においても、それは同じではないでしょうか。

誰かという安心感やたわいもない話で笑え、その延長線上で愚痴や不安を吐き出し、思いやりの声をかけ合える、そんな、人情味あるつながりが日常生活にあればと考えます。

コロナ禍で高齢者施設でもクラスターなど張り詰めており、終わりの見えない日々ではあります。だからこそ世代や立場、施設の隔たりなく、皆で知恵を絞り、安らぎを感じ、会える日常を想像し、一つでもできることから小さな実践を重ね継続していきたいと思います。先達者の方々がつなぎ育ててきた地域に根差した福祉の精神を大切に、「あればいいよね、あんなことしてみたらおもしろいよね、やってみようよ」という気持ちで「居場所の力」を感じるつながりづくりにチャレンジしていきたいです。



社会福祉法人育徳園

いくとくⅡ デイサービスセンター 副施設長 山田 芳子

ご寄附を頂戴しましたこと感謝申し上げます。

セツルの家近隣地域にお住まいの森さんという方から、セツルの家にご寄付をいただきました。昔から多胡さんや木村ハウスの木村さんやお隣の吉谷さんのこともよくご存知で、今はされていませんが以前は琵琶湖で民宿をされていたそうです。森さん素敵なボートありがとうございます。

みんなと琵琶湖で大切にに使わせていただきます。



大地協にロゴマークができました！！

かねてから大地協では「大地協をイメージするマークが欲しいなあ」という声がありました。コロナ禍が続くなか、大地協も施設間の職員交流、「つながり」づくりが難しい状況です。そのような時に今回のロゴマークができたことはとても嬉しいニュースです。このマークには「大地協の「大」に見立て、様々な人が手を取り合ってつくっていきこう。」という想いが込められています。大地協に「つながる」みなさんがこのロゴマークに親しみ、大切にしてくださることを願っています。



特定非営利活動法人
大阪府地域福祉施設協議会

社会福祉法人 石井記念愛染園

「誰かを幸せにし得る人や物事」を伝える

大地協との出会いは、大阪西成・釜ヶ崎にある児童館「こどもの里」が舞台の映画『さとにきたらええやん』制作の際に、同じく釜ヶ崎にある「わかさ保育園」に当時おられた西野伸一さんがきっかけでした。「児童館や保育所、その他関係機関が連携し、一人の子ども、一つの家族を地域で見守る」という地域での取り組みに感銘を受けたことは記憶に新しく、映画の公開後も西野さんには様々な面でお世話になってきました。その後コロナ禍となり、対面での行事が難しくなった際に、全国地域福祉施設研修会のオンライン配信を西野さんからご依頼頂いたことが大地協との出会いとなりました。

私はこどもの里との出会いや、釜ヶ崎で活動する多くの方々にも影響を受け映像制作をしているのですが、「誰かを幸せにし得る人や物事」にこだわり制作を行っています。こどもの里が持つ児童館としての機能や、一時宿泊機能、子どもが地域を離れずに生活が出来るファミリーホーム事業もそうですし、前述した地域連携での見守りも、「誰かを幸せにし得る活動」だと思います。

しかし、自分の周りでは精力的に活動されている方が多くても、子どもに関する悲しいニュースは無くなりません。虐待、いじめ、自死などのニュースは毎日のように流れ、一日に一人以上の子どもが自らの命を絶っている悲しい社会です。そんな中で私に出来ることは、こどもの里のように、常に子どもを中心に置いて子どもの最善の利益を考える、「子どもの居場所」のことを社会へ伝えることだと考え、『ゆめパのじかん』という映画を制作し、今夏劇場公開されました。川崎市子どもの権利に関する条例に基づき開設された「川崎市子ども夢パーク（通称：ゆめパ）」が舞台の本作は、子ども達が「自分を大切にする“じかん”」を過ごしながら様々な事に挑戦し、考え、悩み、時には休息しながら自らを育てていく「こどもの力」を感じられる映画です。こうした安心安全を感じ、自分のことを理解してくれる他者のいる場が、「居場所」を必要とする全ての子どもたちに届くことを願っております。そして最後に…

「誰かの幸せ」のために日々ご尽力されている皆様に感謝いたします。



ガーラフィルム / 監督 ^{しげえ よしき} 重江 良樹

大阪府出身。映像制作・企画「ガーラフィルム」の屋号で活動中。大阪市西成区・釜ヶ崎を拠点に、映画やウェブにてドキュメンタリー作品を発表すると共に、VPやネット動画など、幅広く映像制作を行う。子ども、若者、非正規労働、福祉などが主なテーマ。2016年公開のドキュメンタリー映画『さとにきたらええやん』では全国で約7万人が鑑賞、平成28年度文化庁映画賞・文化記録映画部門 優秀賞、第90回キネマ旬報ベストテン・文化映画第7位。

《 重江監督作品のご紹介 》

『ゆめパのじかん』
yumepa-no-jikan.com



『さとにきたらええやん』
sato-eeyan.com

